

英語とエリザベス女王と私

天道 公平



小学校三年生の時、『ドリトル先生』のシリーズを読んだ私にとって、動物と会話できるドリトル先生は憧れの人であった。しかし、子供心にもドリトル先生のように動物と会話することは不可能だろうと思っていた。「でも、人間の話す言葉ならば努力すれば理解できるようにはなるだろう。よし、人間の話す言葉なら全てを理解できるようになろう！」と私は見果てぬ野望を抱いた。私が目指したのは、バイリンガルやポリグロットへの道ではない。全言語制覇である。当時の私は、この世に六千種もの言語が存在することを知る由もなかった。

手始めに、最も身近な外国語である英語をマスターしようと小学生向けの教科書を買ってきて独学で勉強し始めた。

今から半世紀以上昔の地方都市での話である。覚えてたの英語を使ってみたくても相手がいない。中学生になって英語の授業というのが始まったが、もう知っていることしか教えてくれないので、ちっとも面白くない。

そんな頃、テレビでエリザベス女王のクリスマス・スピーチを聴いた。普段聞き慣れているFENの英語の発音とは全く違う格調高いその響きに「オー、これがクイーンズ・イングリッシュか！」とたちまち私は魅了された。

「ファン・レターを書こう！」と唐突に思い付いた私はそれから数日間頭をひねり、生まれて初めて英語で手紙を書いた。何を書いたかはもう覚えていない。独学で覚えた英語で中学生が表現できるようなことはタカが知れている。きっと読むに耐えないシロモノだったろう。

何とか手紙は書き終えたが、もちろん私はエリザベス女王の住所など知らない。宛先には、『Buckingham Palace, London, England』とだけ書いて投函した。

それから約三ヶ月後、もう投函したことさえ忘れかけていた頃、我が家に通の外国郵便が無い込んだ。私の両親にはそれが何だか理解できないような能力はない。「お前、これが何だか分かるか？」と手渡された封書を見れば、それはまさしく私が三ヶ月程前に投函した手紙への返書ではないか！

「お前、これが何だか分かるか？」

「うん、分かる。エリザベス女王に手紙書いたんだ、その返事」

私の口から出たその返答に意表を突かれたのだろう、父はまさに狐につままれたような表情をしていた。

さて、その返事の内容だが、いたって事務的なものであった。「女王陛下の命により、私があなたの手紙への返事を書くことになりました」と書き出され、「陛下は大変お忙しい方ですので、あなたの質問に丁寧に答える時間がありません。日本には英国大使館がありますので、今後は陛下に直接手紙を送るのではなく、大使館の方に問い合わせるようにして下さい。きつとあなたのお役に立つことと思えます。駐日英国大使館の住所と電話番号は以下の通り……。PS. あなたの英国留学の夢が実現することを祈っております」

何の変哲もない短い手紙だったが、この返書は私に無上の喜びを与えてくれた。

私の英語は英語塾や英会話教室に通って身に付けたものではない。全くの独学である。小学生の時から一人コツコツと学んできたものである。それが通じたということ、今までの努力が報われたということ、それが

何より嬉しかった。

私の下手くそな英語の手紙に、本場イギリスの大人が何の得にもならないというのにきちんと返事を書いてくれたことも私を感動させた。

考えてみれば当たり前のことだが、私の手紙はバッキンガム宮殿に届いたのであつて、エリザベス女王の手元に届いたのではない。極東の島の中学生が出した一通の手紙に対し、丁寧な返書をしたためる習慣が根付いている国なんだ、さすが大英帝国だな、と思った。七つの海を支配していたというのも伊達ではないなと思つたのである。

エリザベス女王宛ての手紙を私は航空便で出したが、返事は船便で届いた。ということはつまり、私の手紙は、イギリスを出た後大西洋を南下し、ジブラルタル海峡から地中海へ入り、スエズ運河を通って紅海に出てインド洋を横断し、東南アジアの島々の間を通り抜けてはるばると日本にまで運ばれてきたわけである。地球を半周する長い長い旅路を経た私の手元に届いたその手紙を眺めていると、私は言い知れぬ感動を覚えた。イギリス王室の紋章入りのその封筒と便箋は私の宝物になったこととは言うまでもない。

【追記】11寸時に繋がってしまうインターネットの時代には、私の味わった喜びを実感として経験することはもはや出来ないであろう。テクノロジーは世界を変えてしまう。

後日譚① イギリス大使館編

せっかく住所を教えてくれたのだからと思つて、イギリス大使館に手

紙を書いてみた。地方の中学生からの手紙が舞い込むようなことはおそらく珍しいことだったのだろう、すぐに返事が届いた。

いったい何が入っているのだろうと思いつつながら開封してみると、一冊の本が入っていた。《The Monarchy in England》というタイトルの本だった。

私はエリザベス女王に関心があるのであって、イギリスの君主制に興味があるのではない。私の質問の意図を読み違えた大使館員の計らいで手になることになってしまったこの本は、とても中学生の手に負えるような本ではなかった。

しかし、何しろ私が初めていただいた英語の本のプレゼントであるから、それはそれは熱心に読んだものである。読んだ、といってもそれはもはや読書といえるような行為ではなく、暗号解読という作業に近いものであった。

徹底的に辞書を引きまくり、関連文献を図書館から借りてきて読みまくり、それでもよくわからない時は学校に持って行って英語や社会の先生に質問した。そして失望させられた。

地方の公立中学校の英語教師にイギリスの君主制に興味を持っている教師はいないし、英語文献を自在に読みこなすような社会科教師もいない。(麻布中学で山口昌男の薫陶を受けた川本三郎、などというのは例外中の例外ともいえるべき学習環境である。)

自力で調べるしかないと悟った私は、ますます《The Monarchy in England》に集中することになり、結果的にはこの本が私にとっての『ターヘル・アナトミア』となった。

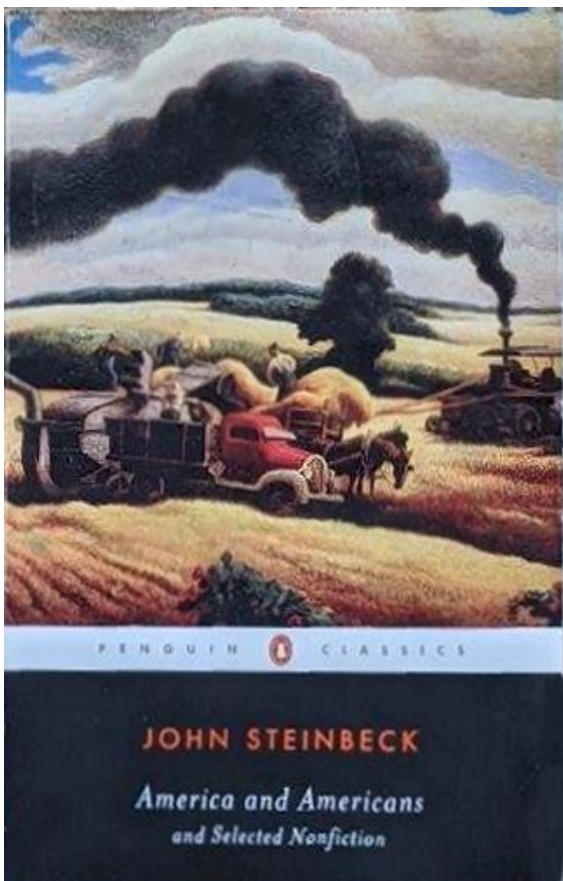
この本を一冊読み終えた時の私の英語力は、もはや中学生レベルのものではなくなっていた。

後日譚② アメリカ大使館編

イギリス大使館の対応を考えると、他の大使館も同じような対応をしてくれるのではないかと思つた私は、アメリカ大使館にも手紙を書いた。

同じように一冊の本が送られてきた。それが何と、ジョン・スタインツクの《America and Americans》であった。私の質問に対する何と適切な応答であったことか！ むさぼるようにして読み、お礼を兼ねて感想を書いて送った。

高校に進学した四月のある日のこと、我が家に《TIME》が送られてきた。それから毎週《TIME》が届くようになった。もちろん私は定期購読の申し込みなどしていない。心当たりのある親類縁者には全て訊いてみたが誰一人として知っている人はいなかった。いったい誰がお金を払う



んだらうと心配だった。一度も代金を請求されることもなく、それが大
学に進学するまで三年間続いた。

あの〈TIME〉はいつたい誰の配慮によるものだろう？ 真相は藪の中
だが、私の出した結論は、アメリカ大使館のご厚意によるものではな
ったか、というものである。「手紙をくれたあの中学生も今年から高校生
か。そろそろ〈TIME〉も読みこなせるようになるだろう。勉強の手助け
に毎週送ってあげることにするか」ということだったのではなかるう
か？

私の手紙に対して、スタインベックを送ってくれた〈あの人〉しか思
い当たる人が誰もいない。

後日譚③ フランス大使館編

英米両大使館の反応で味をしめた私は、次いでフランス大使館にも手
紙を書いた（愚かにも英語で！ 無知な中学生のやりそうなことである）。

送られてきたのは、「エッ！ こんなものをタダで貰っていいの？」と
思うような立派な写真集であった。フランス各地の四季折々の風景に短
いフランス語のコメントが添えられた素敵な写真集であった。後年、私
がフランス語を専攻するようになった要因を遡っていけばこの写真集に
たどり着く。

フランス語とフランス文化の普及に関しては国家レベルでの努力を惜
しまない国の出先機関であるフランス大使館ならではの対応というべき
だろう。人の心を掴み、フランス文化に靡かせるにはどのようなものが
効果的かを知り尽くしたうえのプレゼントだったと思う。その戦略に私
はうまうまと乗せられたわけである。

後日譚④⑤⑥……

この後日譚の大使館シリーズは、④⑤⑥……と続けるつもりだったが、
いざ書こうとしてみると記憶があまりにも曖昧で錯綜していて、とても
文章にはならないことに気が付いた。

私の質問に対して、関連項目を英語の百科事典から借用してコピーし
て送ってくれたのは、西ドイツ大使館だったかスペイン大使館だったか、
もう思い出せない。

カンガルーやコアラの絵葉書を送ってくれたのは、オーストラリア大
使館だったか、オーストラリアのラジオ局だったか定かではない。

アジアン・テイスト満開の切り絵を送ってくれたのは、中国大使館だ
ったか北朝鮮の日本語放送のスタッフだったか、もう覚えていない。

要するに、英米仏大使館が送ってくれた本ほどのインパクトを私に与
えていない、ということなのだろう。人の記憶とは現金なものである。

